

一、はじめに

「海蔵地区の地名を調べて」も四回目となりました。第一回目には、地名を調べる意義などを述べました。ことに、地名は時代と共に生きていくことを強調しました。それは、地名研究や旧地名保存などの動きをもたらしていることも述べました。最近では、地名を題材にした社会科の授業の成果が、全国各地から報告されています。

さて、このような動きの中で、(一)二三年の間に、四日市市においても新町の設定がなされています。

例えば、富田地区に富田栄町ができました。新町が設定されることは喜ばしいことです。他方では旧町名が滅失したこともありません。

海蔵地区においては、どんな動きが町名などにありましたか。

二、野田村のおこり

野田の地名由来は三滝川、海蔵川が形成した湿地地から名称づけられたものといわれます。これら海蔵地区を知る手がかりとして、昭和三十年海蔵小学校刊行の「海蔵小誌」があります。地名の由来は定説化していませんが、野田村

に関する記事があり、随分参考になります。

野田村の開拓について、野田は、生桑や坂部方面から移住し、新田を開拓したが、三滝川と海蔵川の両川との戦いは開祖以来続けられた。野田にも南島と北島の区別があり、その開拓者を異にしている。(約五〇〇年前)と記述されています。この文の根拠として「神領給人引付」「倭名抄」などを引用していることや、「神鳳抄」の記録によるとこ



三、江戸期の野田村

野田村の江戸期前半の資料は乏しく、その支配の変遷さえ不明瞭であります。しかし、江戸初期はともかく、中期からの様子は何とか

海蔵地区の地名を調べて その四

四日市市総務課 主幹 森逸郎

ろから興味をそられます。応和二(九六二年)に三重郡は伊勢神宮領荘園となりましたが、鎌倉時代に書かれた神宮領の目録ともいえるべき「神鳳抄」に「野田御園七反」を引用しておきながら、約五百年前に野田村の起源を求めているのは如何なものでしょうか。少なくとも平安時代後半には、野田村の集落が存在したことが推定されます。また、神宮領荘園として、室町時代ごろまで存続したものと考え

く、中期からの様子は何とか格好がつくほどにその支配の変遷が知れます。江戸前半は幕府直轄地(天領)であったのが、享保十一年隣接する末永村とともに有馬氏の支配となります。

有馬氏は、八代將軍徳川吉宗の時、旗本側用人から一万石の大名として、この野田、末永両村などを加封された藩です。このことは、同年隣接の東西阿倉川両村を加封されて大名となった加納氏も同様で

す。有馬氏は、初期には河曲郡神戸西条に陣屋をおき、寛延二(一七四九)年からは同郡林崎において野田・末永両村を支配しました。西条も林崎も、今は鈴鹿市の一町をなしています。

野田村の斗代(石高)は、明治大学所蔵の「伊勢国高郷帳」によると、四八九石余りでした。また、陣屋から村を治めるにあたり、村には庄屋、年寄

野田村明細帳は、幸いにも江戸期後半のものが保存されています。東京にある徳川林政史研究所に所蔵されていて、当時の野田村の諸色が詳細に知れます。

四、水との戦い

野田村は、古来より絶えず水に悩まされ続けてきた。早水となれば、上流と下流との水引き争いが、また、豪雨ともなれば洪水に、それも上流域の破堤が最も恐れられた。

明治年中、野田村と末永村がその村境の山家堤をめぐって争ったのもその一例であって、他に、延享三(一七四六)年生桑村との出入の例もあります。

各家文書をさがせば、まだまだ知られない江戸時代の野田村の動きは発見されると思います。

五、資料収集にご協力を

四日市市は、昭和五十八年十月より史料調査委員会を発足させ、市内各所にねむる歴史的史料の所在調査に努めています。

野田村明細帳は、幸いにも江戸期後半のものが保存されています。東京にある徳川林政史研究所に所蔵されていて、当時の野田村の諸色が詳細に知れます。

グリコ・森永事件はいつになつたら解決するやら……。市内北部で起きた小・中学生の怪人二十一面相二世事件は、背筋の寒い思いが致しました。やはり、大人社会の反映以外の何ものでもないでしょう。

編集後記

もうすぐ春。花見が昨年のようにならずにと念じて。

編集委員会

